

# 万寿寺地藏菩薩像胎内文書の影写について

和田 幸 大

一九九七年、画像史料解析センターの実験的作業の一つとして、万寿寺地藏菩薩像胎内文書の検討が行われた。このプロジェクトチームとして、研究部からは黒田氏・久留島氏・高橋(敏)氏が、史料保存技術室からは画像処理を担当する吉田(成)氏、そして影写の和田が要請された。

この万寿寺地藏菩薩像胎内文書は、墨の重なりが多い料紙では、両面とも二重三重に墨書されているために文字がつぶれてしまっており、これまで判読されて来なかったのも無理ないと思える程の文書である。(部分図1)そのため、どこまでそれぞれ担当の者が力を出しきり、プロジェクトチームとして力を合わせ成果を上げられるかという態度で、この文書へ取り組んでいったのであった。

以下は、影写が出来上がるまでの記録である。

## 一、原本の状態

所蔵／三重県伊賀町万寿寺

装丁形状／卷子本

料紙／楮紙

紙数／十紙

影写する料紙の寸法(纏)

A 縦二六・七 横三六・〇  
B 縦二六・九 横三八・一

文書は、南北朝期の地藏菩薩座像の胎内に納められていたものである。かなり以前から知られている文書だったが、二重三重に墨書された文字は研究者の読解をはばみ、今日まで一応の判読もされないままにいたったものである。本プロジェクトでは、その中でもかなり難解な二紙(図1-A・B)の両面のみを影写することになった。

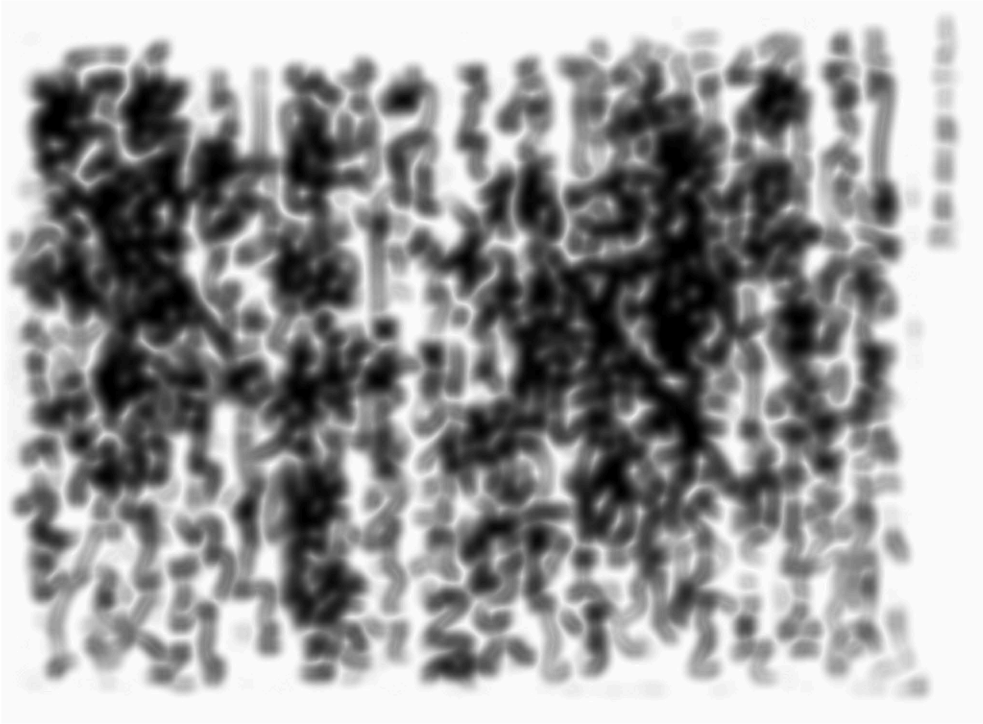
尚、この二紙については、以下の利用をされていることが判明した。①書状、②①の裏を更に別の書状として利用、③手習いのために利用し種々の文字を書き入れる、④②の書状の書き手の菩提を弔うために「南無地藏大菩薩」と図1-Aの紙背に書き入れる。①④は全て別の人の手による筆蹟であり、①と②はともに書状であるが、書かれてある内容・時代も全く別のものである。

A・B両紙とも利用の度に更に文字が重ねられている。又、和紙自体が薄手であるため、書かれた文字の墨痕が紙背にまで染み込んでおり、解読するにも影写するにもかなり困難な文書である。

## 二、影写が出来上がるまでの手順

最終的に影写を制作するのが目的だが、その都度考えられる範囲の作業を試行錯誤しながら行った。プロジェクトチームとして、影写担当の作業と、研究部の古文書の文字判読・内容の検討の作業とを照らし合わせる事

A



万寿寺地藏菩薩像胎内文書  
図1 書状1

B



B 紙背

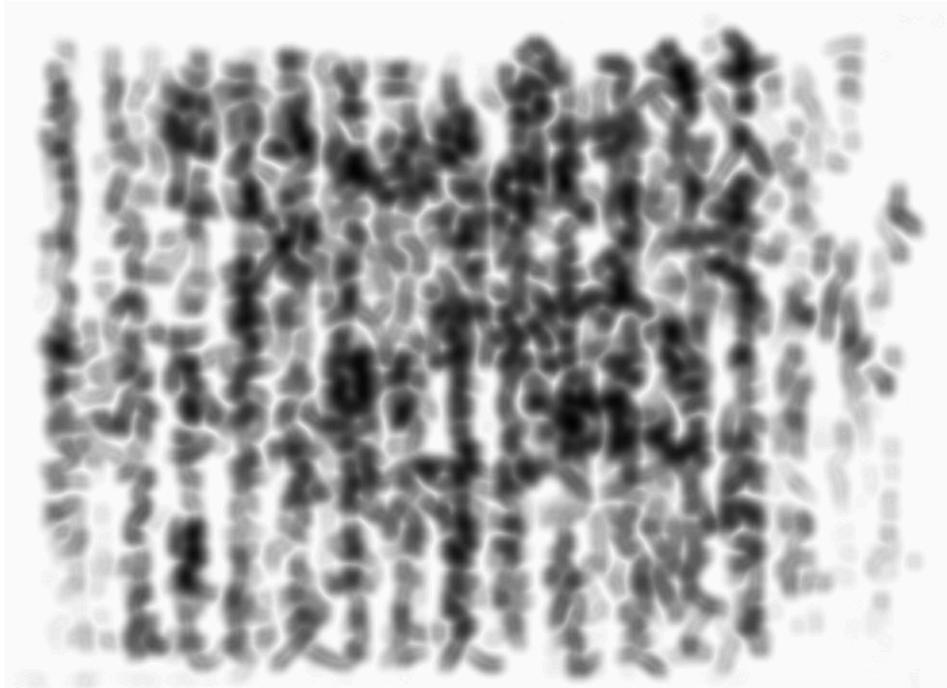
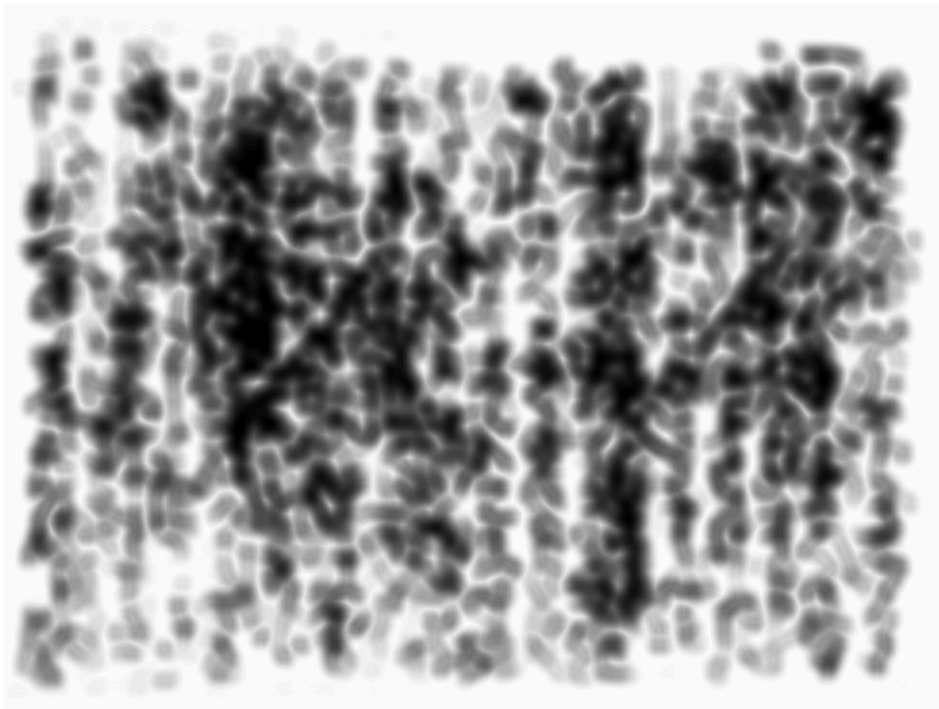


図 I  
書状 II

A 紙背



により徐々に影写作業の目処がついていった。

#### 〈1〉色鉛筆による文書の線の抜き出し

解読するのさえ困難な文書に対し、プロジェクトチームとしてまず始めに手がけられる事は、原本からかすかな墨色の違いによる墨線の抜き出しであった。原本の上に保護目的のポリエステルフィルムを重ね、その上に影写用の半透明の和紙を重ねる。墨線はいくつにも重ねられているので、重なった墨線は必ず色鉛筆の色を変えるようにした(図2)。墨の重なりが多いところでは七色もの色を変えなければならぬ箇所もあった。わずかに残った残画から何とか推定できる文字もあったが、どうしても文字として抜き出せない部分もあった。

この作業により、文書の全体像をつかむことができ、更に次の作業へ進めるきっかけともなった。この色鉛筆による線の抜き出しは、かなり時間のかかる、根気のいる作業であった。

#### 〈2〉原文の読み合わせ

〈1〉の作業の色鉛筆で抜き出したものと原本をプロジェクトチームに持ちより、それらを照らし合わせるにより原文を検討した。字形がかなり崩れている文字や何の文字か認識できない箇所については、図1以外の同筆の文字と比較したり、前後の内容や文字数等から確定することとなった。

#### 〈3〉写真の上からホワイトで消す作業

影写では直接原本の上に和紙をのせ書き進めるのが一般的だが、この文書のようにかなり線が込み入っている文書では、原本の上からそのまま影写していたのでは、どの線が書き出す線か分からなくなってしまう。その

ため、今回は原本を側に置き、必要な線のみ抜き出した原本の代わりとなるものを作り、その上から影写する方法を試みた。原本の写真撮影し(本所技術官吉田成氏による) 必要以外の文書の線をその上からホワイトで消し、それを原本の代わりとして作製した(図3)。

写真撮影の際には、原本の下から当てる光を調節し、墨の濃淡の差が最大限に出るような撮影方法をとってもらった。しかし、それでも墨の線が交錯している箇所は、写真だけでは墨線の動きが分からなかった。そこで、原本から残画や筆勢・墨の粒子の動きを忠実に観察し、確定した原文と照らしあわせることにより文字の輪郭を残す事が出来た。

#### 〈4〉影写

〈3〉でも述べたが、原本の代わりとなる写真を下に引き、その上にポリエステルフィルムそして影写用和紙をのせ、側に原本を置いて影写作業を進めた。このようにして二紙分の書状二通(図4-1・Ⅱ)と「南無地藏大菩薩」の墨書(図4-1・Ⅲ)の影写が出来上がった。

筆意、筆勢、線質および墨色が原本の質感を表現できるよう、何度も数種類の用具を試した結果、用いた筆および墨は以下のものとなった。

図4-1 筆「文琳」(平安堂製)	墨「玄香」(和田榮寿堂製)
図4-1Ⅱ 筆「松のみどり」(平安堂製)	墨「含翠」(青墨)「墨運堂製」
図4-1Ⅲ 筆「夏毛」(平安堂製)	墨「玄香」(和田榮寿堂製)

#### 三、制作を終えて

初めてこの文書を目にした時は、このような文書を影写出来るのだろうかというのが正直な気持ちであった。しかし、プロジェクトチームとして作業を進め、その場に応じて臨機応変に対処していく事でその不安は解消されていった。

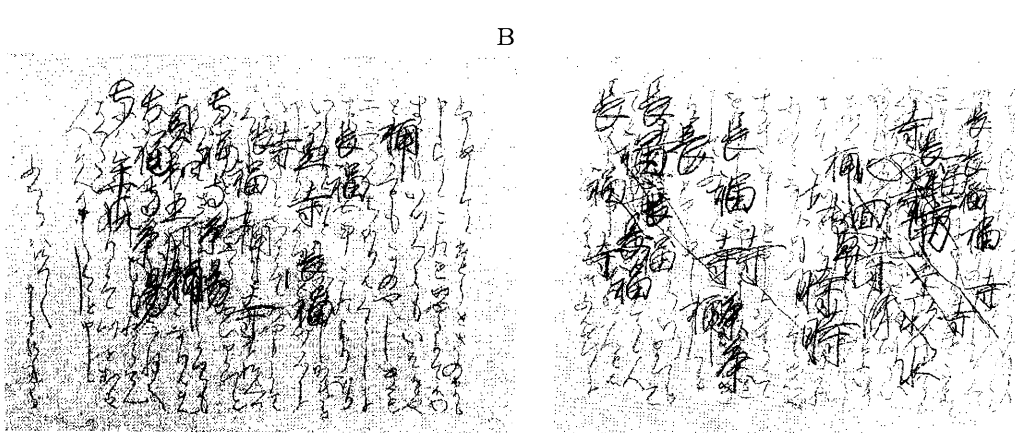


図2 色鉛筆で線を抜き出したもの

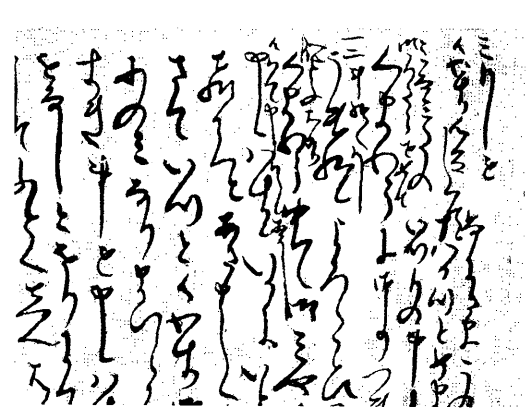


図3 書状I-A 部分拡大

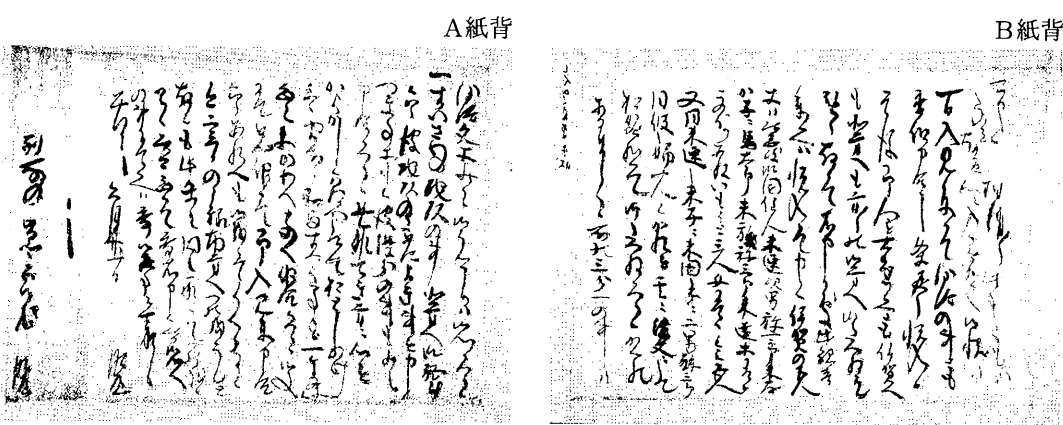
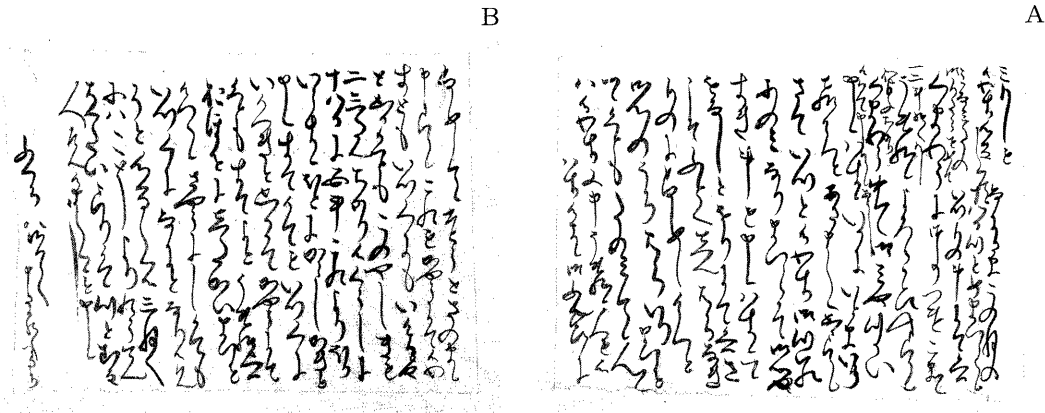


図3 写真上から必要以外の線をホワイトで消したもの

図4 完成した影写作品

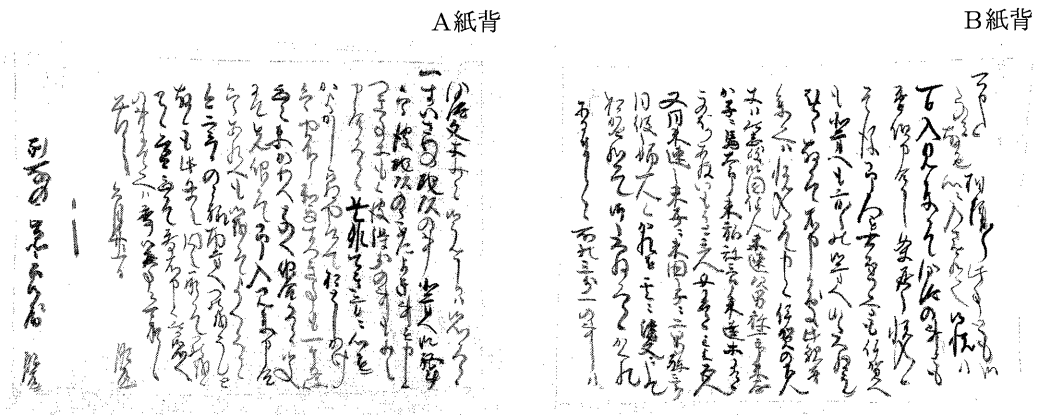
書状Ⅰ



A

B

書状Ⅱ



B紙背

A紙背

III

南无地蔵大菩薩

十月二十二日に行われた、画像史料解析センターの開設式においてその成果の一部が披露された。難解な文書を、プロジェクトチームの各担当者が専門的見地から対処し、一つの成果を現すことができた。影写にとっても、今後の業務の幅が広がったということができると思う。

今回の作業では比較的時間を割く事ができ、余裕をもって取り組めたので、出来上がった影写に関しては、墨色等細部まで観察・検討することができた。